



Title	巻頭言：臨床死生物学・老年行動学講座開設30周年を迎えて
Author(s)	権藤, 恭之
Citation	生老病死の行動科学. 2024, 28, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95658
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卷頭言

臨床死生学・老年行動学講座開設 30 周年を迎えて

Celebrating the 30th Anniversary of the Establishment of the department of Clinical Thanatology and Geriatric Behavioral Science.

権 藤 恭 之

「生老病死の行動科学」28号をお届けします。今年は、大阪大学人間科学部に講座が開設されて30年を迎えたので、本誌の巻頭言から過去を振り返えります。本雑誌は、講座開設された3年後の1996年に初代教授の柏木哲夫先生によって「臨床老年行動学年報」として始まりました。2004年に2代目教授の（故）藤田綾子先生が「生老病死の行動科学」と誌名を変更され、現在に至ります。巻頭言は、第8号の恒藤暁先生を除き歴代の教授が執筆しており、2010年からは3代目の教授の佐藤真一先生そして、昨年度から私が担当しています。

講座開設初期の年報からは、臨床経験に基づき新しい研究分野を開拓していくのだという柏木先生の強い決意と新しい分野に対する希望を感じました。また、研究室のメンバーが増え臨床という冠に恥じない研究室に籠らない多様な研究が行われていたことがうかがえます。また、1999年には、東館に研究室の移動、2000年には大学院重点化に伴い講座名が漢字30文字になったことなど、研究室の内外で様々な変化が起こっていたことがわかります。

「生老病死の行動科学」と名前が変わった後、藤田先生は日本の心理学において高齢期の研究がどれだけ行われてきたかを振り返られています。そして、高齢者を社会の問題として捉え研究するのではなく、新たにポジティブな側面に注目した研究を行うべきだと提唱されています。退職後も藤田先生がお亡くなりになるまで、高齢者のプロダクティビティーに注目し、研究してきたことは多くの方がご存じだと思います。また、自身が監訳されたエイジングハンドブック第6版を概観し、先人たちが、高齢者心理学が個別的な現象を明らかにしてきた業績を認めたうえで、統合的に人間としての高齢者の理解を進める段階に差し掛かったと述べられています。

佐藤先生は、社会情勢と臨床死生学との関係について、その時々に起こった出来事を交えながら、私たちの講座が向かう方向性について書かれることが多かったと思います。在任中に東日本大震災、公認心理師コースの設置、日本老年学会と日本老年医学会の合同ワーキンググループによる高齢者の定義の見直しの提案など大きな出来事がありましたので、佐藤先生の考えは私たちも自身の研究を見つめなおすきっかけにもなりました。その中でも、忘れられない出来事はCOVID-19パンデミックです。佐藤先生はこの件に関して、バルテスの生

涯発達モデルに基づき論考されています。

10年ひと昔といわれますが、30年の歴史を振り返ると、私たちの講座が常に社会状況と向き合う中で、現場の知見と研究室の中で行われる研究を融合しながら研究を進め、生老病死に真摯に向き合ってきたことがわかります。人間の人生で考えれば30歳は、社会とのかかわりの中で研鑽を積み人格が固まってきた時期だといえます。臨老人格もようやくおぼろげながら固まってきたようです。人生100年時代において30歳は、まだまだ若造であります。40歳に向けて臨老人格が成長し完成するよう、講座メンバーとともに研鑽いたします。講座関係者、学会関係者の皆様、これからも指導・ご鞭撻いただけるようお願ひいたします。

「生老病死の行動科学」第28巻をお届けします。インターネット上の公開もしていますので、そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫（OUKA） <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

また、当研究室のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学研究室 <https://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/index.html>